

七曲台における縄文時代の居住形態について

— 居住形態の変遷に関する一試論 —

谷 地 薫

1 はじめに

七曲台は雄物川の支流岩見川の左岸に広がる標高約39m～65mの台地の一部である。^(註1)この七曲台は1983～85年にわたって工業団地造成と高速道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われ、18遺跡が発掘調査された(第1図～第11図)。その調査報告書は既に刊行されており、^(註2)『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』(秋田県文化財調査報告書第150集)には、七曲台全体の調査成果のまとめが掲載されている。筆者もこの調査の一部を担当し、報告書の一部を執筆したが、本稿はその際に分担執筆した七曲台における縄文時代の居住形態に関する記述に、食糧の獲得と消費にかかわる側面から若干の私見を加えてまとめたものである。

尚、七曲台の立地環境や個別の遺跡の内容については報告書に拠っているので、それを参照していただきたい。本稿で使用した図、表はすべて報告書に掲載されているものである。

2 縄文時代前期前葉以前

七曲台は更新世から既に何らかの人間活動の場として利用されていた。しかし発掘調査された18遺跡から得られた結果からみる限り、更新世の最終末期から完新世の縄文時代早期までは人間活動の痕跡は認められない(第1表)。その後も前期前葉の遺物が例外的に石坂台Ⅰ遺跡で出土したのを除いて前期中葉までは遺物が出土していない。七曲台は縄文時代前期中葉までの人々にとっては利用価値を認める対象に含まれておらず、ほとんど人跡未踏の地であったか、あるいは七曲台の一部を利用していたが遺構、遺物を残さないような利用のしかただったのであろう。

人間が大地に対してそれを変える何らかの働きかけをしていたとすれば他の時期のようにその結果としての遺構、およびそれに使用した道具の中で遺物として現在まで残る可能性のあるものが検出されるはずなので、それらの遺構、遺物が残される諸活動(居住、埋葬、貯蔵、祭

祀等)以外の活動の場として利用されていたということになる。例えば採集や狩猟の場、または人々の移動の際の単なる通過点といったようなものであろう。

ところで、この七曲台と同様の傾向は、同じ岩見川下流域に位置する御所野台地にも共通して認められる。^(註3)御所野台地でも前期中葉までは坂ノ上B遺跡、小阿地遺跡C地点を除いて遺物が検出されておらず、両遺跡とも居住地とは断定しがたい。周辺に居住地が認められず、出土した遺物量が少なく、出土地点も七曲台で1カ所、御所野台地で2カ所であることを考えれば、採集や狩猟の場であるとしても、ごく限られた期間に狭い範囲で利用されたに過ぎず、岩見川下流域の河岸段丘は前期中葉までは人々にとって積極的な利用価値が認められないような場所だったのではないと思われる。それは恐らくは当時の岩見川下流域の微地形、気候、動植物相等の自然的諸条件に起因するものと思われる。

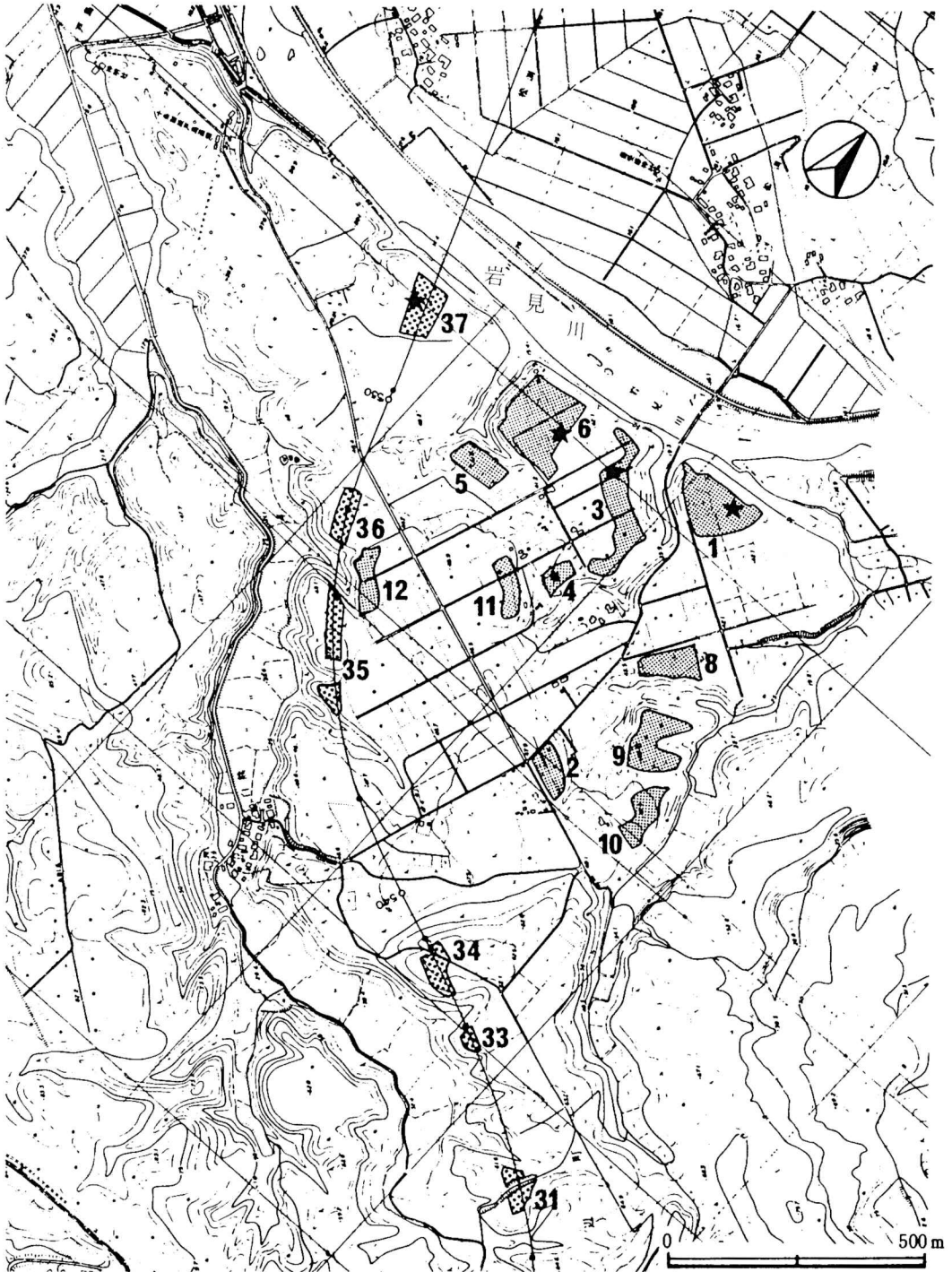
3 前期後葉

前期後葉になると様相は一変する。七曲台では5カ所で遺物が出土し、風無台I遺跡では土坑も検出されている。御所野台地でも11カ所の遺跡が発見され、そのうちの3遺跡では竪穴住居跡が検出されている。人間活動の場所としての土地利用がどちらかといえば否定的であった前期中葉までに比べて、前期後葉には七曲台、御所野台地ともに人々が積極的な利用価値を見出ださうな場所へと変わったのである。

七曲台の5遺跡のあり方はいくつの特徴が認められる。

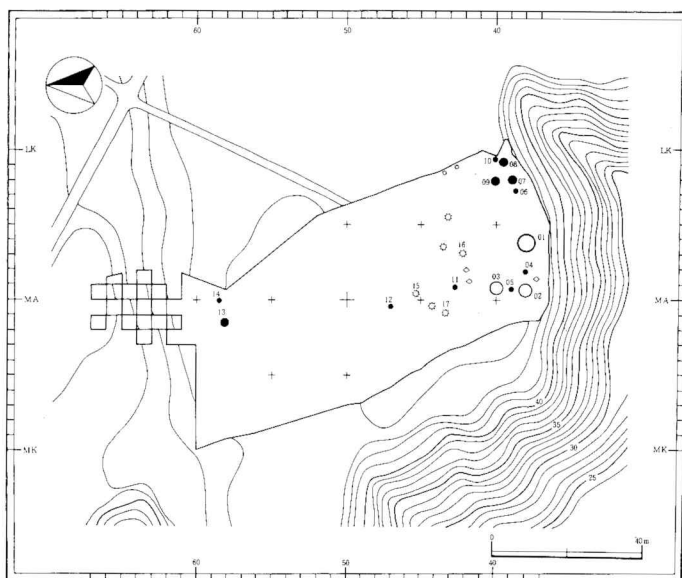
遺跡の立地は、低位段丘の七曲台面と上野台面、中位段丘の椿台面のいずれにも及んでいる。したがって七曲台は段丘崖という地形的制約にもかかわらず、広範囲にわたって何らかの活動の場所として人々に意識されていたといえる。

また、5遺跡とも竪穴住居跡は検出されていない。さらに、七曲台の前期後葉の5遺跡のうち4遺跡までが、中期まで継続して利用された痕跡が認められない。前期後葉に何らかの活動の場として利用されていた場所が中期前葉にも継続して利用されているのは、既に前期後葉において土坑が構築されていて他の4遺跡よりも濃密な人間活動の痕跡が認められた風無台I遺跡のみである。各遺跡から出土した遺物量からみても、連続性をもって長期間にわたって遺跡のある地点が人々に利用されていたとは考えにくい。したがって食糧や燃料などの最終的な消費の場所は別に存在するのか、または極めて短期間だけ居住したが、大地にその痕跡が残るまでには至らなかったのか、のいずれかである。

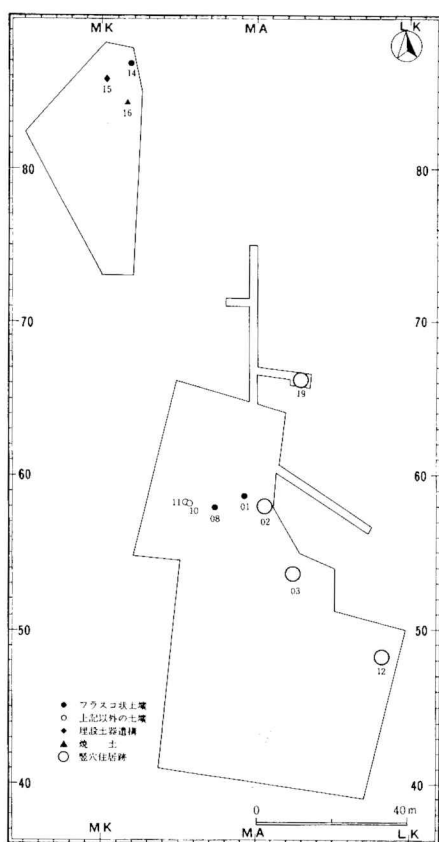


- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|--------------|---------------|
| 1 : 風無台 I | 2 : 石坂台 I | 3 : 風無台 II | 4 : 風無台 III | 5 : 松木台 I |
| 6 : 松木台 II | 8 : 風無台 V | 9 : 餅田沢 I | 10 : 餅田沢 II | 11 : 石坂台 II |
| 12 : 石坂台 III | 31 : 石坂台 IV | 33 : 石坂台 VI | 34 : 石坂台 VII | 35 : 石坂台 VIII |
| 36 : 石坂台 IX | 37 : 松木台 III | | | |

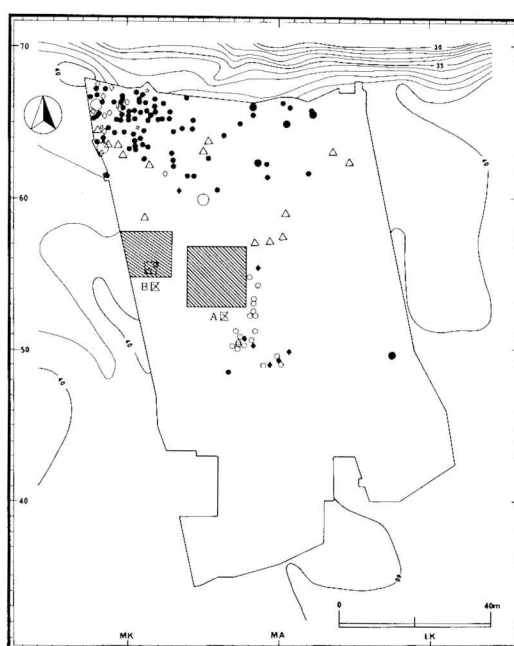
第1図 七曲台における遺跡の位置



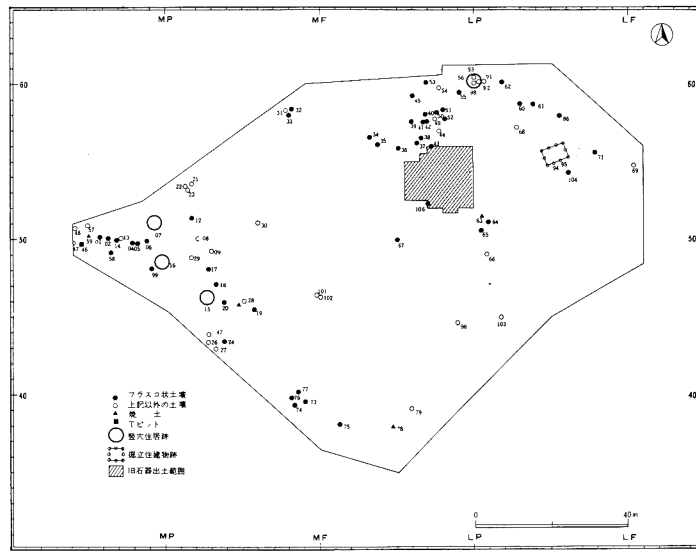
第2図 風無台 I 遺跡遺構配置図



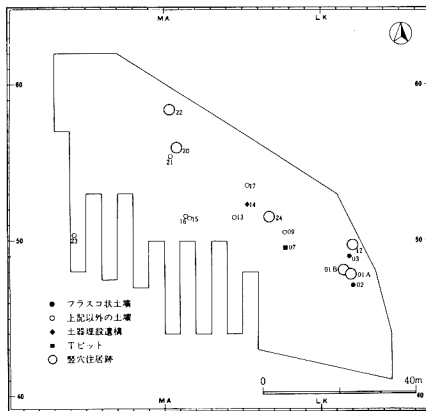
第3図 石坂台 I 遺跡遺構配置図



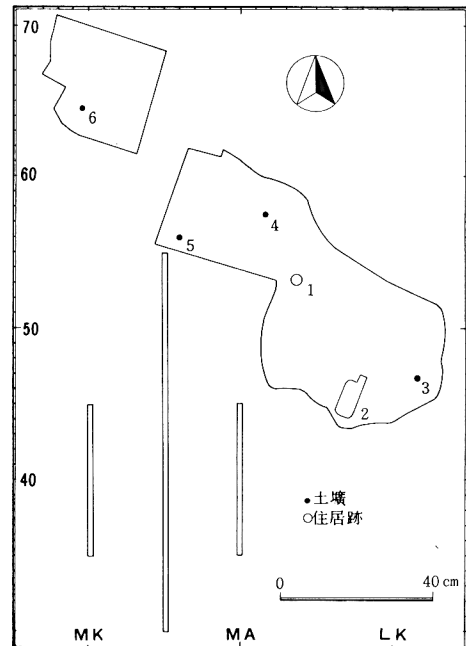
第4図 石坂台 II 遺跡遺構配置図



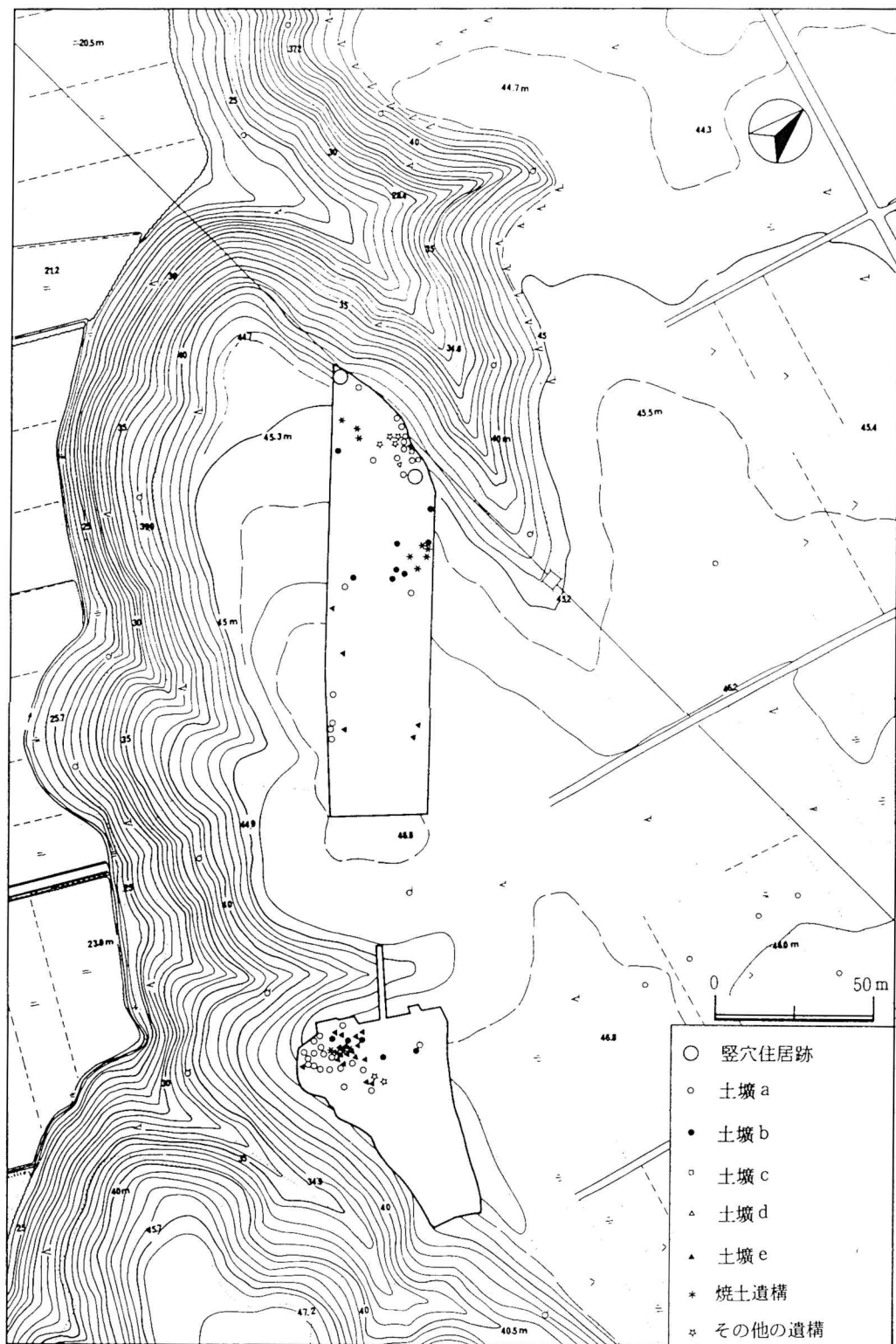
第5図 石坂台Ⅳ遺跡遺構配置図



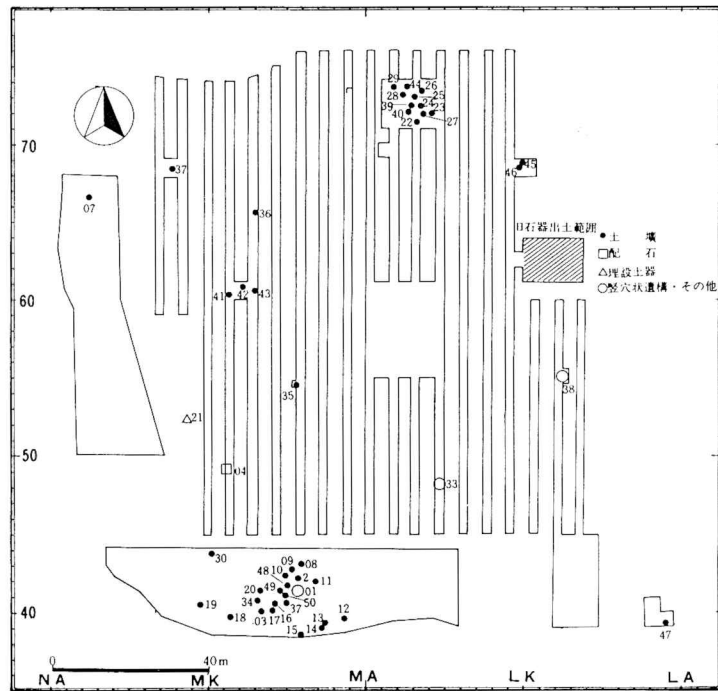
第6図 餅田沢Ⅱ遺跡遺構配置図



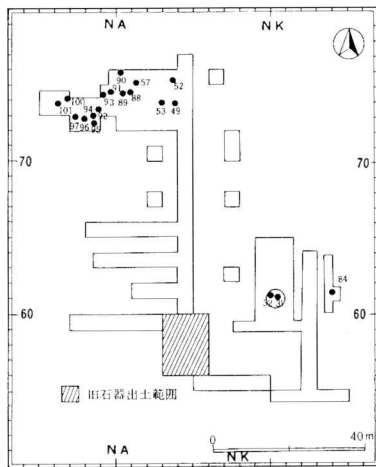
第7図 松木台Ⅲ遺跡遺構配置図



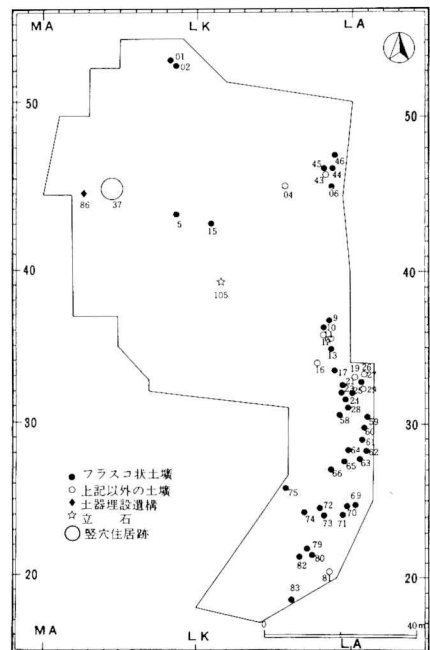
第8図 石坂台Ⅶ遺跡遺構配置図



第9図 松木台Ⅱ遺跡遺構配置図



第10図 風無台Ⅱ遺跡西側遺構配置図



第11図 風無台Ⅱ遺跡東側遺構配置図

第1表 七曲台の縄文時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	前期			中期			後期			晩期			段丘面
		前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	
1	風無台Ⅰ			◇	◆ ₁	◆ ₁		◆ ₂	◇				◇	七曲台面
2	石坂台Ⅰ	◇				◆ ₁	◆ ₁	◆ ₂		◇			◇	上野台面
3	石坂台Ⅱ						◆ ₁							上野台面
4	石坂台Ⅸ				◇	◇	◆ ₃		◇				◇	上野台面
5	石坂台Ⅲ				◇					◇			◇	上野台面
6	松木台Ⅲ					◇	◇	◆ ₃	◇			◇	◇	七曲台面
7	石坂台Ⅶ			◇				◆ ₁	◆ ₁			◇		上野台面
8	餅田沢Ⅱ							◆ ₃	◇		◆ ₁			上野台面
9	松木台Ⅰ			◇				◇	◇					七曲台面
10	風無台Ⅴ							◇	◇					七曲台面
11	松木台Ⅱ								◇			◇	◇	七曲台面
12	石坂台Ⅶ			◇					◇				◇	椿台面
13	石坂台Ⅳ			◇		◇				◇			◇	椿台面
14	風無台Ⅱ										◆ ₁		◇	七曲台面
15	石坂台Ⅵ											◇	◇	椿台面

◆—住居跡が検出された遺跡、住居跡の軒数 ◇—遺物が出土した遺跡

第2表 七曲台縄文時代住居跡一覧表

No.	遺跡名	住居跡No.	床面積	炉	時期
1	風無台Ⅰ	5 6	27.3m ²	地床炉	円筒上層a
2	風無台Ⅰ	1 6	11.0	土器埋設炉	大木8a
3	石坂台Ⅰ	2 2	6.7	---	大木8a
4	石坂台Ⅱ	0 1	7.7	---	大木8b
5	石坂台Ⅸ	0 1	17.2	複式炉B	大木9
6	石坂台Ⅸ	0 2	5.7	地床炉	大木9
7	石坂台Ⅸ	0 3	11.6	複式炉B	大木9
8	石坂台Ⅰ	0 1 B	10.3	複式炉A	大木9
9	石坂台Ⅰ	0 1 A	9.8	複式炉A	大木10
10	石坂台Ⅰ	1 2	6.3	複式炉A	大木10
11	餅田沢Ⅱ	0 2	5.3	複式炉B	大木10
12	餅田沢Ⅱ	0 3	2.5	複式炉B	大木10
13	餅田沢Ⅱ	1 9	4.8	複式炉B	大木10
14	松木台Ⅲ	2 7	4.6	複式炉B	大木10
15	松木台Ⅲ	9 2	5.0	複式炉B	大木10
16	松木台Ⅲ	1 0 7	3.9	地床炉	大木10
17	風無台Ⅰ	0 7	4.9	土器埋設炉	大木10
18	風無台Ⅰ	1 5	5.9	土器埋設炉	大木10
19	石坂台Ⅶ	0 4	5.5	複式炉B	大木10
20	石坂台Ⅶ	1 1	---	地床炉	後期
21	餅田沢Ⅱ	1 2	4.0	地床炉	晩期前葉
22	風無台Ⅱ	1 0 4	---	地床炉	晩期
23	松木台Ⅱ	0 1	---	地床炉	晩期
24	風無台Ⅱ	3 7	40.8	石囲炉	弥生
25	石坂台Ⅰ	2 0	5.1	地床炉	-----
26	石坂台Ⅰ	2 4	---	石囲炉	-----

* 複式炉A=埋設土器+石囲部+掘り込み部

複式炉B=埋設土器+掘り込み部

4 中期前葉

七曲台では中期前葉になって初めて竪穴住居跡が営まれたようである。風無台Ⅰ遺跡では前期後葉の土坑と重複して円筒上層a式期の竪穴住居跡が検出されている（第2表）。この竪穴住居跡は床面積が 27.3m^2 で、七曲台で検出された縄文時代の竪穴住居跡の中では最大である。検出地点が前期後葉の土坑と重複し、継続性が認められることから、前期後葉に七曲台に足跡を遺した人々の系譜をひき、人々相互の関係も類似する人々がなんらかの理由で居住地を変えていく行為の一端として風無台Ⅰ遺跡に竪穴住居を営んだものであると理解したい。御所野台地では前期後葉から中期中葉にかけては、大型住居を含め比較的床面積の大きい竪穴住居跡が多いが、風無台Ⅰ遺跡のSI56竪穴住居跡は七曲台でもその傾向が共通していることを示しており、岩見川下流域の一般的傾向であるといえる。

七曲台でも御所野台地でも、前期後葉～中期前葉の遺物出土地点は比較的多いが、その中に占める竪穴住居跡を伴う居住地の割合は高くない。また、同時期に近接して複数の竪穴住居跡が営まれることはほとんどない。

中期前葉～中葉にかけて竪穴住居跡を伴う居住地遺跡の割合が増大する傾向にあることからみて、しだいに、竪穴住居跡を構築してそれに居住する生活様式に変化していったものと思われる。そして広範囲を諸活動（その中心は恐らく採集等の食糧獲得に関わるものであろう）の対象としながらも、居住地はその範囲内にあまり分散せず、比較的床面積の大きい竪穴住居跡が単数で営まれるという生活様式がしだいに定着するようになったと考えられる。

御所野台地では前期後葉以降も継続して遺物が出土し、中期前葉～中期中葉にも継続して竪穴住居が営まれていたと考えられるが、七曲台では風無台Ⅰ遺跡の地点が中期前葉に当時のこの地域にあって数少ない居住地として選択されるものの、その後大木8a式期までは人間活動の痕跡が認められない。このような七曲台と御所野台地における前期後葉～中期前葉の遺跡のありかたの違いは、各地点が当時の人々によってどう評価されていたかを物語るものであろう。

ところで、七曲台の5遺跡のうち松木台Ⅰ遺跡を除く4遺跡は台地面は異なるものの、いずれも七曲台全体でみた場合その縁辺部に位置する。松木台Ⅰ遺跡も七曲台を南から北へ開析している比較的幅の広い沢に面した台地縁辺部に位置している。この位置関係からして当時の人々の移動には、植物が繁茂していれば視界が悪く方角を見失う恐れのある台地の中央部ではなく、常に沢に向かって視界が開け、方角を見失う恐れのない台地の縁辺部が利用されていたことが推測される。この時期にはこのような食糧の獲得の場とその貯蔵や消費の場を結ぶ『道』が台地縁辺部に自然に形成されていき、それが食糧獲得とその運搬に限らず、多様な原因や目的による人々の移動に利用されるようになるのであろう。

このことは、中期中葉～後期の遺跡についてもある程度共通して認められる。中期中葉の居住の場には風無台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡（大木8b式）、石坂台Ⅱ遺跡（大木8a式）が選択されていた。これらの遺跡の他、中期中葉の土器が出土している石坂台Ⅲ遺跡、石坂台Ⅸ遺跡はいずれも低位段丘上野台面にあり、しかも七曲台の東端を画する餅田沢と南西端を画する白熊沢の沢筋にはほぼ直交して両沢を結んでいる上野台面北縁端に沿って位置する。このことから上野台面北縁端に沿って餅田沢と白熊沢をつなぐ、上野台面に住む中期中葉の人々の諸活動の場を結ぶ『道』の存在が想定される。大木10式期の竪穴住居跡も上野台面ではやはりこの『道』すじ上にある台地縁辺部から検出されている。この、いわば縄文時代の七曲台横断道ともいふべき『道』は後期前葉までは確実に存在したと思われる。その後の時期ではそれまでとやや異なって上野台面よりも七曲台面が頻繁に利用されるようになるので、七曲台面の各遺跡を結ぶ『道』のほうがより多く利用されていたと考えられる。

5 中期中葉～後葉

中期中葉になると再び遺跡数が多くなり、6遺跡から遺物が検出されている。その内の3カ所が竪穴住居跡は検出された居住地である。また中期後葉には更に遺跡数が増えその中における居住地の割合も高くなる（第1表）。

大木8a式期になると4遺跡で遺物が出土し、風無台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅰ遺跡で各1軒の竪穴住居跡が検出された。大木8b式期には3遺跡で遺物が出土し、石坂台Ⅱ遺跡で1軒竪穴住居跡が検出された。大木9式期になると3遺跡から遺物が出土し、石坂台Ⅰ遺跡、石坂台Ⅸ遺跡から計4軒の竪穴住居跡が検出されている。大木10式期では7遺跡から遺物が出土し、その内の5遺跡から計11軒の竪穴住居跡が検出された。これらの竪穴住居跡のありかたにはいくつかの特徴がある。

まず、大木8a～大木9式期の遺物が出土した遺跡数が3～4遺跡であるのに対して、大木10式期の遺跡数は7遺跡で約2倍に増えている。また、各時期の総遺跡数における居住地遺跡数の割合は、大木8a、8b式期では約50%なのに対して、大木9、10式期では約70%に上昇する。さらに、大木9～10式期以外は一時期の一遺跡に営まれる竪穴住居は1軒であるが、大木9～10式期には石坂台Ⅷ遺跡を除いた他の4遺跡はいずれも2～3軒が営まれている。また、各竪穴住居跡の床面積は時期によって一定の傾向性が認められる。すなわち、中期前葉の円筒上層a式期では上述のように27.3m²と大型である。ところが再び七曲台に人々が居住し始めた大木8a式期、8b式期の竪穴住居跡はそれに比べて床面積は小さく、風無台Ⅰ遺跡のSI56竪穴住居跡の5分の2～4分の1である。大木9式期には10m²を超えるものが多く、中期中葉に

比べてやや大型になる。そして大木10式期では小型化が顕著になり、約5 m²と大木9式期の2分の1になる。

以上の特徴は、検出された竪穴住居跡数が七曲台よりもはるかに多い御所野台地にもほぼ共通してみられる。特に遺跡数が大木9式期までに比べて大木10式期では約2倍になること、大木8b式期では居住地遺跡数の割合が約40%なのに対して大木9式期では約70%、大木10式期では90%以上の高率を示していることは、竪穴住居跡の絶対数が比較的多いだけに七曲台よりも鮮明に傾向性を示しているといえる。また、大木9式期以前では一時期の一遺跡に営まれる竪穴住居がほとんど1軒なのに対し大木10式期には複数になり、大型の竪穴住居跡もあるものの小型の竪穴住居跡が多くなることも共通する。

このような居住地や居住形態の変化は、七曲台に居住した縄文時代の人々のどのような行動を反映しているのであろうか。

中期中葉までは一時期の一遺跡に営まれる竪穴住居跡は1軒である。この竪穴住居跡に居住していた数人が食糧獲得等の諸活動の一単位であり、同時にその消費の単位でもあったと考えられる。大木9式期では一時期の一遺跡に複数の竪穴住居跡が営まれるようになり、大木10式期にはそれが一般的なあり方として定着するようである。

これは大木9～10式期には一カ所に居住し食糧獲得等の諸活動を共同で行う人々の中に、全体から相対的に独立した小単位のグループが生成し、居住（寝泊り）、炉を使用する燃料消費等の活動場面ではこの小グループが単位となっていたことを示している。食糧の消費活動については、この小グループが顕在化する当初から相対的独自性を保持していたかどうかは不明であるが、当初は未分化であったとしても、居住場面における一体性は燃料の消費にとどまらず、生存の基本的要件である食糧の分配と消費の場面においてもしだいに一体性のある最小単位として機能したと考えられる。つまり食糧獲得場面において構成されている一単位の人々は、その消費場面においては複数の小単位に分離しているのである。

しかし、食糧等の消費場面においては小単位の人々が相対的に独立していたとしても、生存の根本条件である食糧の獲得活動ではより多くの人々と共同で行わざるを得ず、この小単位の人々が他の人々とかかわりなく独自に食糧獲得活動を行い、それによって一定の水準の生活を維持していける段階までには至っていなかったといえる。

食糧獲得活動における全体への依存性を規定していたのは、より多くの人々による活動のほうがより多くの食糧を獲得できるような獲得方法であったと考えられる。

縄文時代のように食糧の獲得が採集、狩猟、漁撈等のように人間の手による再生産活動以外の手段に依存している場合には、食糧獲得活動を一緒に行い、獲得された食糧の分配・消費にあずかる人々の人数と、それらの人々によって獲得された食糧の量との間に生じる関係によっ

て、それらの人々の人間関係、活動内容、居住形態が多様に変化する。人々の生活水準の向上、つまり一人当たりの食糧消費量の増大を生み出すのは、人員の増加率よりも食糧獲得量の増加率が大きい場合である。

その一例として人員の増加、つまり獲得活動に投入される労働力の増加が食糧獲得量の増加を生み出す場合が考えられる。それには次の3種類の場合がある。

- (i) 小人数でも可能な獲得活動のうち、それに投入される人数と獲得活動の達成量(食糧獲得量)が比例して増大する場合
- (ii) 小人数でも可能な獲得活動のうち、それに投入される人数が一定以上になると作業のやり方を質的に変化させることが可能となり、作業効率が著しく向上し、その結果達成量が増大する場合
- (iii) 小人数では不可能な獲得活動だが、一定以上の人数になるとそれが可能となり達成量が増大する場合

これらのような、人員の増加が食糧獲得量の増大につながる状況にあるときには、諸活動を行う一単位の人々の人数は増加する傾向にある。そのときには人々相互の人間関係の変化を伴うこともある。

採集活動は(i)のケースである。一人の人間が採集できる量は限られており、獲得量を増やすためには採集活動を行う人員を増やすしかない。狩猟や漁撈は(i)から(ii)へと進んで追い込み漁のような複雑な方法が可能になり、さらに(iii)へと進んで巻き狩り的な大がかりな狩猟も可能になる。このように人員の増加が一定の水準に達するまでは人員増加＝達成量(獲得される食糧の量)の増大という関係にあって、人員の増加は生活水準の向上にとって肯定的な要素となる。

しかし、獲得活動に投入される人員が増え続けると、一人当たりの達成量(獲得された食糧の一人当たりの分配量)の増加率は鈍り始め、やがて減少に転ずる。すなわち一人一人の食糧消費量を減らさざるを得なくなる。この状態では人員の増加が生活水準の向上にとって否定的な要素となる。

採集活動を例にとれば、採集活動は一カ所に居住する限り人員の増加は活動方向の多様化とはなるが人間が歩いて行動するという制約から活動距離の延長とは結びつかない。したがって一定の人員増加までは活動方向の多様化によって食糧獲得量の増加が見込めるが、それが限界に達した時点で獲得量は最大となり、その後の人員増加は獲得量の増大に寄与せず消費量のみを増大させる。つまり一人当たりの分配、消費量の減少という生活水準の向上にとって否定的な要素に転化する。

狩猟の場合であれば、小人数より人が多いほうが複雑で大がかりな狩猟ができ、狩猟対象動物の範囲も拡大されるので獲物の量も多くなる。しかし当時の狩猟用具の種類、強度、精度や、

人間が徒歩で行うことを考えれば、獲物が増えるように狩猟のやり方に工夫を凝らしたり狩猟場面における分業化を進めたとしても、獲物が期待通りに人間の増加に比例して増え続けると保証されているわけではない。また、一地点の居住地に住む人々が狩猟の為に徒歩で行動できる範囲は採集活動と同様に限界があり、それは人員の増加によって直接的に拡大されていくものではない。この範囲内に棲息する狩猟対象動物の量には当然限度があり、狩猟方法の改良等によって狩猟能力が向上してもこの範囲内のすべての動物量以上には獲物は増えないのである。

消費場面における小単位の人々の相対的独立性は、そういう消費の形態をとることが可能なだけの量の食糧を獲得できていたことをも示している。消費単位の複数化を可能にするだけの食糧は、七曲台では大木9式期において既に獲得することができるようになっていたと思われる。^(註4)

大木9式期の竪穴住居跡の床面積が比較的大きいのは、居住人員がそれ以前とあまり変わらなくても屋内に複式炉が構築されることでその分だけ床面積が増えたことにもよるであろうが、それよりも食糧獲得量の増加によって生活水準が向上し、生活の安定度が相対的に増して、居住人員の自然的増加現象が起っていたことによるものであると考えられる。^(註5)

この傾向がさらに進むことによって人々の内部に何らかのより強い結び付きをもつ小人数の人々のまとまりが顕在化してきて、それが大木10式期の一竪穴住居跡に居住する食糧等の消費単位としての小単位になるのであろう。

大木10式期において遺跡数が大木9式期の2倍に増加する現象については、すべての遺跡の竪穴住居跡が同時に営まれたわけではなく、それらには大木10式期に含まれる中での時期差があることに起因するものであると思われる。一時期に同時に存在した居住地点が急に多くなったというよりは、大木10式期の中で居住地点を変える行為が何回かにわたって行なわれた結果によるものであると理解したい。この場合、大木10式土器が使用されていた期間が他の土器型式の期間に比べて2倍近く長い期間だったのか、それとも一地点に居住している期間が他の時期の竪穴住居跡に比べて短く、頻繁に移動を重ねていたのかは判断し難い。ただし石坂台Ⅸ遺跡では、大木9式期の竪穴住居跡群を中心として周辺のやや広い範囲から、ある程度の量の同時期の遺物が出土しているのに対して、松木台Ⅲ遺跡や石坂台Ⅶ遺跡では、大木10式期の竪穴住居跡の周辺から出土する同時期の遺物量が極めて少量であることを考えると、大木10式期の一地点における居住期間は大木9式期のそれに対して若干短かったのではないかと考えられる。

七曲台にあっては大木9～10式期に形成された上述のような人間関係は、風無台Ⅰ遺跡にみられるようにその後大木10式期の後半から終末の時期まで大きく変化することなく継続していたと思われる。しかし獲得された食糧の分配・消費の単位が、相対的に自立性を強めつつある

各堅穴住居毎であるためには、食糧獲得と消費の単位が未分化である状態に比べてより多くの食糧を獲得する必要がある。そのために居住地周辺における食糧獲得等の諸活動がより活発になって、それだけ活動の対象とした自然を変化させる度合も大きくなる。その結果として食糧獲得活動が制約を受けるまでに至る時間が相対的に短くなっていったと考えられる。

一人当たりの食糧の分配、消費量が減少する場合として、上述のような居住人員の過度の増加以外にも、生活環境の変化も考えられる。

縄文時代の人々は人間自らが行う生産活動ではなく基本的には人間以外の自然の再生産活動に寄生する形での採集、狩猟、漁撈等の食糧獲得活動を行って生活している。その生活環境の変化が人々の生活を大きく変え、人間関係、活動内容、居住形態等に多様な変化を引き起こす場合もある。生活環境の変化は気候、地形の変動やそれに伴う動植物相の変化といった自然的原因の他に、人間の生活そのものに起因する場合がある。人々がある地点に居住してその周辺が採集、狩猟、漁撈のような食糧獲得の場になり、人間自身の再生産のために消費活動が継続して行なわれることによって、主に人間活動の対象となった動植物相等の自然に変化が生じる。たとえば湖沼や河川の富栄養化に伴う水中、水辺の動植物相の変化、居住地周辺の土中の窒素成分の増加による植生の変化、木の伐採による二次林の増加、食糧植物の減少、動物の習性の変化や移動等である。そしてこれらの人間の生活が引き起こした生活環境の変化によって逆に人間の食糧獲得活動が制約を受けるようになり、食糧獲得量の減少を招くという状態にまで至る場合もある。そうなれば当然一人当たりの食糧の分配・消費量を減少させ生活水準の向上にとっては否定的要素となる。

それでは、居住人員の増加や生活環境の変化が生活水準の向上にとって否定的要素に転化したとき、人々はどのような行動をとるのであろうか。

消極的には、そのままの状態で生活水準を低下させていくとか、自然淘汰に任せて人口の自然的減少によって居住人員と食糧獲得量の均衡を保つかといった適応のしかたがある。また人々が自らの人間関係、活動内容、居住形態等を変化させて積極的に生活水準の維持、向上や人員の増加を継続させる適応のしかたもある。前者であれば人間自身の再生産は縮小再生産とならざるを得ないが、後者の場合には拡大再生産が可能である。

6 後期初頭以降

大木10式期の堅穴住居跡が11軒も検出されているのに対して、後期初頭～前葉になると遺物は9遺跡で出土したものの住居跡は石坂台Ⅷ遺跡で1軒検出されたのみである。

大木10式期の住居跡が比較的プランのはっきりしている堅穴住居跡であったのに対して石坂

台Ⅷ遺跡で検出された住居跡は、地山面では堅穴の壁ははっきりせず、柱穴の配列と地床炉によって確認できたものである。後期には複式炉が姿を消すことも関連して、住居のつくり自体に大きな変化があって大地に深い痕跡が残らなくなっていた可能性もあり、実際にはもっと多くの住居跡があったにもかかわらず、発掘調査によっては検出できなかった可能性を全く否定することはできない。

七曲台では後期初頭になると突然居住地遺跡が激減するのだとすれば、そういう状況をもたらしたところの人々の人間関係、活動内容に変化があったことが推測される。

後期前葉の土器片が七曲台の各地点に残されているということは、住居跡が激減したといっても七曲台が全く人間活動の場として利用されなくなったのではなく、人間がその場所において土器を伴う何らかの活動を行っていたということである。それには、居住以外で最も可能性の高いものとして、食糧採集活動、及び採集食糧の貯蔵活動が考えられる。

中期と後期前葉の遺物出土状況を比較してみると、中期では堅穴住居跡が検出された遺跡で堅穴住居跡の中や周辺から遺物が多く出土するのに対して、後期前葉では、石坂台Ⅶ遺跡、石坂台Ⅸ遺跡、風無台Ⅰ遺跡のように貯蔵穴と考えられる土坑が検出された遺跡で土坑の中や周辺から遺物が出土するという傾向が認められる。

このような居住の場から採集、貯蔵の場への変化をどのように解釈すればよいのか、まだわからない点が多いが、一つの見方として後期初頭になると何らかの理由で食糧獲得量に変化が生じ、大木10式期のような生活様式を継続していくことが不可能になったか、あるいは継続する必要がなくなったと考えられる。そのために食糧獲得活動を行う範囲が居住地周辺のみならずかなり遠隔地まで広げざるを得なくなって、(または広げることができるようになって)人々が他の相対的に条件のいい場所に移住してしまったのではないだろうか。

採集活動を行うたびに採集地から直接居住地(＝消費地)に運搬する場合は、一度に運搬できる量には限りがあるので、それ以上の採集物があれば反復して運搬しなければならず、運搬に費やされる労働がかなりの比重を占めることになる。それに対して採集地に貯蔵施設がある場合には、さしあたってはその貯蔵施設に収納しておいて必要な時に必要な量だけ居住地(＝消費地)に運搬すればよいので、採集物の運搬にはほとんど労働力を割かないで採集活動を行うことができる。したがって同じ労働量を投入したときには、採集地に貯蔵施設を持っているほうがより多くの労働を食糧採集に投入することができ、獲得される食糧の量が多いし、食糧確保の安定度も高い。

このような食糧獲得場面における変化が背景にあって、七曲台からそう遠くない所に居住地を移し、居住地周辺の他に七曲台をも含む範囲に食糧獲得活動を展開していたのではないだろうか。その場合に食糧獲得活動の単位とその分配、消費の単位の関係が大木10式期と同じであっ

たか変化があったかといった人間関係や居住形態については、居住地の資料が少ないのでわからない。

ただ、中期後葉から後期初頭にかけての居住形態の変化の背景として、後期初頭の気候の変化による動植物相の変化、または人間が居住したことによって引き起こされる居住地周辺の自然環境の変化があったのではないだろうか。この変化によって起こり得る状況として、次の2つが考えられる。

- (a) 七曲台で獲得できる食糧の量が減少し、七曲台よりは食糧獲得の条件の良い場所に移住したものの、それだけでは必要量を確保できず、七曲台をも含めた広い範囲を食糧獲得活動の対象とせざるを得なくなり、その中の各採集地に貯蔵施設を設けて、できる限り多くの食糧の確保を図った。
- (b) 七曲台の中でも後期の人々が居住に適すると判断しそうな場所は、すでに大木10式期までに居住地として利用されていたために、その周辺の環境が変化していて居住地としては適さなくなっていた。後期の人々にとって七曲台は食糧が採集できる場所としては十分利用価値をもっているものの、居住地としては評価されない場所となっており、居住地は七曲台以外に求められた。しかし、食糧採集活動の場所としては利用を継続した。

いずれの場合においても、採集地に貯蔵施設を設けることによって採集活動を行う際に採集地と居住地(=消費地)を必ずしも近接させる必要がなくなったことは、当時の人々が積極的に自然環境の変化に適応しようとしたことの現れであるといえよう。

しかし(a)の場合、自然環境が広い範囲にわたって大きく変化したとすればこの程度の対応では適応できず、もっと大規模な対応をする必要に迫られ、岩見川下流域での居住そのものにまで影響を与えた可能性があり、それが後期前葉の居住地遺跡数及び住居跡数の減少のみならず、後期中葉以降の遺跡数の減少ともなって現れているのではないだろうか。その場合は恐らく大木10式期のような食糧獲得活動の単位の内部にその消費活動を行う小単位を維持していくことはできなくなって、再び両者を一体化せざるを得なくなるばかりか、さらに進んで人口の自然的減少さえも起こっていた可能性がある。(b)の場合のみが進行したとすれば、七曲台以外の新たな場所で居住が継続していることになるので、今後の調査によっては他の場所で多くの住居跡が検出される可能性が高い。もしも、(a)・(b)の両方が複合していたとすると当時の人々にとってはかなり厳しい状況であったと思われる。

後期中葉以降は居住地遺跡がほとんどなく、七曲台はむしろ墓域として人々に意識されていたようである。晩期の遺物が出土した遺跡の数は比較的多いが、その多くは土墳墓との関連で把握できるようである。

7 まとめ

七曲台における居住形態を前期から後期までを通してみると、中期の大木9式～10式期が際立った様相を示している。すなわち、居住地遺跡の増加、及び一遺跡における竪穴住居跡の複数化と小型化である。ここまで、食糧の獲得と消費場面における人々の労働と分配の関係を手掛かりにして、この現象に一つの解釈を試みた。まとめると、まず大木9式期頃までに、食糧獲得量の相対的増大を背景にした人口の自然増加現象が起こった。その人々が行う食糧獲得活動は、投下される労働力と獲得される食糧の量が比例して増加するような方法であったため、人口の増加と食糧獲得量が相互に拡大し合う好循環構造が生じた。それによって、食糧等の消費場面において最小の単位となる、一居住地にあって同じ竪穴住居に居住する小単位のグループが顕在化してきた。

しかし、自然に寄生する形で行われる食糧獲得活動にあっては、その小単位の人々が完全に自立し、分化するほどの量は獲得できない。一居住地点における獲得食糧量が限界に達した後は、人口の増加は一人当たりの食糧分配量の減少に転化する。大木10式期に比較的短期間営まれたと思われる居住地遺跡の数が増えるのは、食糧獲得方法を変えずに、獲得する食糧の量的水準を維持しようとした結果、短期間のうちに居住地周辺の環境の劣化を引き起こし、頻繁に居住地を変えたことによるものである。中期末から後期初頭における大きな変化は、それまでの観点から選択される居住の適地が既にほとんど失われ、食糧獲得活動及び居住形態の新たな展開を迫られた結果であると考えられる。

以上、発掘調査によって得られる事実の解釈という側面を中心に私見を述べた。これは事実から帰納して得られた確固たる解釈といったものではなく、事実を分析するにあたっての見通しという程度のものである。本稿には多くの仮説が含まれているが、一つ一つの仮説を具体的に検証していくための方法の検討と、その検証作業が必要であることは言うまでもない。

七曲台とは岩見川を挟んで北に広がる御所野台地では、開発に伴う発掘調査によって、七曲台に比べて膨大な資料の蓄積がなされており、本稿で述べた諸事項を検証するためには、その分析が不可欠である。今後の課題としたい。

本稿は『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ』の作成の際に執筆した草稿を手直ししたものである。報告書作成時には能登谷宣康氏に本稿にかかわる資料整理をしていただいた。また小林克氏からはご助言をいただいた。記して御礼を申し上げる次第である。

註

- 註1 本稿で対象とする七曲台は、岩見川左岸の台地のうち、北西～南東方向に入る大きな沢である白熊沢と、北～南方向に入る餅田沢によって区切られた北西側の、東西約2km、南北約1.2kmの区域である。
- 註2 秋田県教育委員会 『七曲臨空港工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第125集 1985（昭和60年）
秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ 石坂台Ⅳ遺跡・石坂台Ⅵ遺跡・石坂台Ⅶ遺跡・石坂台Ⅷ遺跡・石坂台Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡』 秋田県文化財調査報告書第150集 1986（昭和61年）
- 註3 秋田市教育委員会 『小阿地』 1976（昭和51年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書（下堤G遺跡ほか）』 1983（昭和58年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書（坂ノ上E遺跡ほか）』 1984（昭和59年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書（下堤E遺跡ほか）』 1985（昭和60年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書（地藏田B遺跡ほか）』 1986（昭和61年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書（地方遺跡ほか）』 1987（昭和62年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書（下堤C遺跡）』 1987（昭和62年）
秋田市教育委員会 『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書（下堤A遺跡）』 1988（昭和63年）
武藤康弘 「小阿地遺跡C地区出土の縄文時代前期前半の遺物について」 『秋田考古学』 第37号 1981（昭和56年）
- 註4 大木9～10式期の竪穴住居跡には複式炉をもつものが多く、竪穴住居跡の床面積の大小にかかわらずかなりの斉一性をもって認められる。炉は食糧等の消費活動のほか、祭祀等の精神活動とも密接に関わるものであり、消費単位の分化と時期的に対応していて興味深い、未解決の様々な問題点があり、ここでは触れない。
- 註5 石坂台Ⅸ遺跡では報告書で述べているように、大木9式期に竪穴住居跡数が増える現象が起こっていた可能性がある。